婚活中毒

石神賢介

恥ずかしながら、誰よりもたくさん

婚活をしてきた。

あらゆる婚活にトライした著者が、
内側からも外側からも婚活の真実を描き切った。

すべての

成婚したい人

必読の書。

沼にはまって気づいたこと！

婚活中毒

石神賢介

星海社

267

SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

恥ずかしながら、誰よりもたくさん婚活をしてきた。

婚活を始めたのは１９９０年代半ば。30代後半だった。それから30年近く、婚活パーティー、結婚相談所、婚活アプリ、婚活バスツアー、婚活ハイキング、婚活ディナー、婚活ランチ、婚活料理教室、婚活座禅、婚活クルージング、たこ焼き婚活……などに参加してきた。

出会った女性は数えきれない。食事やお茶やドライブをした女性は３００人を超えている。その数をかつて記事に書こうとしたら、３００人は非現実的なので１００人にしてほしいと、出版社の人に言われた。アドバイスにしたがって「会った女性は１００人以上」と記したが、実際は３００人ではきかない。

その長期にわたる〝活動〟で得た知識や体験をベースにこの本を書いていきたい。

筆者のスペックは誇れるものではない。いわゆるイケメンとはほど遠い容姿だ。身長は

１６６センチしかない。この五年で３センチも縮んだ。加齢のせいだろう。体重は75キロもある。頭はおはちが張り、手足は短い、典型的な農耕民族体型の昭和人だ。

還暦も迎えた。今は65歳〜74歳を前期高齢者と定義しているらしいので、高齢前夜、〝アラカン〟だ。婚歴は30代前半の一回。一年もしないうちに妻には逃げられた。学歴は大卒だが、東京郊外の私立大学に二年浪人して入れてもらった。職業はいうまでもないが、文筆業。個人事業主。つまり収入も生活も不安定だ。

それでも、婚活ツールを利用すれば、コンスタントに女性と出会えてきた。会社員をはじめ、ＣＡ（キャビン・アテンダント）、女優、モデル、銀座のホステス、シンガーソングライター、ドクター、看護師、秘書、コンパニオン、華道の師範、極道の元情婦……などと交際してきた。悪戦苦闘、創意工夫、堅忍質直の成果だと自負している。

もちろんつらい思いはたくさん体験した。詳細は後で述べるが、口説きに口説いて１００回くらいデートをしたのに、手もつなげなかったこともあった。容姿に恵まれた高スペックの女性にジジイと罵倒されたこともあった。高額な服や靴をねだられて買ってしまったことも一度や二度ではない。

そんな苦戦も努力も虚しく、還暦を迎えても結婚にいたってはいない。

いけないのは自分自身。十分に承知している。

第5章で詳細を書くが、自我が育ち切ってしまった。

20代で交際した女性とは、一緒に新作映画を観たり、コンサートを観たり、食事をしたり、二人で楽しみ、二人で嗜好を育てていった。

40代を過ぎると、そうはいかない。自分が好きな映画も音楽もご飯も、はっきりとわかっている。苦手なものもわかっている。嫌いだと感じているものはなかなか受け入れられない。嫌なことに誘われると、気持ちが重くなる。一度は付き合っても、二度目は断る。相手に合わせようとするとストレスになる。口内炎ができる。

世の中に趣味嗜好や価値観がまったく同じ相手などいない。頭ではわかっている。歩み寄らなくてはいけないと思う。しかし頭が固くなり、自分と異なる価値観を受け入れられない。

中高年の男が出会う女性は、たいがいは中高年だ。相手もすでにたくさん生きている。男ほど頑固・偏屈ではないにしろ、自我は育っている。短期間ならば合わせられるが、3か月、半年と交際が続くと、おたがいに苦しくなってくる。

一人の暮らしにも慣れ切ってしまった。自宅に他者がいると落ち着けない。30年にもわ

たる一人暮らしでわがままになり、自分の生活への他者の介入はストレスになる。
交際する女性が家に遊びに来るのはもちろん嬉しい。楽しい。しかし、翌日もそのままずっといられると、そろそろ帰ってくれないかなあー、と思う。好きな時間に飲食して、仕事をして、本を読んで、自分だけのために時間を使いたい。

一方、社会の状況だが、日本の婚活ビジネスはこの30年で成熟した。婚活アプリでも、婚活パーティーでも、正しく利用して正しい努力をすればパートナーと出会える。
この出会えるという事実が、実は落とし穴だ。最初は楽しい。しかし、人と人。なにもかもが合うなどあり得ない。ちょっとした食い違いが生じると、そこで交際をやめてしまう。相手に執着しない。アプリやパーティーなど婚活ツールを利用すれば、またすぐに次の相手に出会えるからだ。
自分はまだ婚活市場で需要があるという思い上がりも交際の進展をさまたげる。
いろいろな女性と交際するのは楽しい。常に新鮮でいられる。その誘惑に抗(あらが)えず、婚活沼にずぶずぶに浸かっていく。結婚相手と出会う目的で始めたはずの婚活なのに、いつのまにか婚活そのものを楽しむようになっている。

このマイナスのスパイラルが「婚活中毒」だ。

もっといい人に出会えるはず。もっと自分と合う人がいるはず。もっといい仕事をして、社会的な評価を上げれば、もっといい異性と縁ができるはず。そう思って、いるわけがない理想の相手を求めて婚活を続ける。一種の現代病といっていいかもしれない。

婚活アプリにいつまでも継続して登録している会員は多い。入会と退会をくり返している会員も多い。婚活パーティーでは、男女とも同じ顔に何度も会う。前の週末にパートナーを見つけてうれしそうに帰った人が翌週にはまた同じパーティーに参加している。

3回続けて婚活パーティーで会った40代のシングルマザーで、大型トラックのドライバーは、パートナーを見つけるためのはずがいつのまにか男性と会話をすることが目的で参加していると、笑いながら話していた。パーティーでは多くの男性が必死に自分にアプローチしてくれる。それがうれしくて、毎週末参加してしまうらしい。プチ・ホストクラブのような感覚だろうか。

婚活アプリをはじめ、今の婚活ツールは年々進化し続けている。社会とマッチしているのだろう。だからこそ長期間続けると、婚活から抜け出せない。

この本では、今の婚活というものを内側からも外側からも見て書いていく。

たとえば婚活の場には、ロマンス詐欺、投資や宗教への勧誘目的の男女が一定数いる。売春目的の男女もいる。今でいう〝パパ活〟〝ママ活〟だ。その見分け方をはじめ具体的・現実的な状況についても述べたい。

なお、本書に登場する人物はすべて実在するので、個人を特定できないようにしています。年齢をプラスマイナス2歳以内で変えたり、職種を近いものに変えたり、場所を変えたり、なにかしら配慮しています。ご容赦ください。

目次

はじめに 3

第1章 婚活のメインストリームになった婚活アプリ 17

セックス直後にお経を唱えた女 18
5人に1人が婚活アプリで出会って結婚 22
「あなた、バカ?」 25
贅沢な生活がマストの女性 27
前途多難 29
新山千春、鷲見玲奈、渡辺直美……が次々とアプリ利用を告白 31
女優ともアナウンサーとも出会う 32
ヌード写真を送ってくれる元女優 34

初期の婚活アプリでモデルやCAとイチャイチャ 37
婚活アプリ犯罪史 41
コロナで高まった世の中の結婚願望 42
39、49、59歳は〝婚活発情期〟 44

第2章 アラカンでも出会える婚活アプリ 47

登録者数の多い婚活アプリを選ぶ 48
プロフィールで本気度を示す 51
プロフィール写真は必須。人は顔のわからない相手とは会わない 53
申し込む相手を検索 56
男は大きな胸と従順さに弱い 59
婚活は営業と同じ。大切なのはアプローチ数 61
メッセージ文より、数を優先？ 64

歩み寄れるかは、初回の対面で判断 67
自己評価の高い女性は年下君が好き 69
楽しい行事を提案しよう 72
不自然な日本語のアプローチは詐欺を疑う 75
自分を過大評価しない 78
ロマンス詐欺被害者の証言 80
コロナで失業して婚活アプリでパパ活 81
ギャラ温泉、ギャラカラオケ、ギャラ登山 83
アプリ内に増えるライヴ動画配信サービス業の女性 86
食事を求めて婚活する女性たち 90
ひたすら食べる自称アイドル 92
無縁だった業種や職種との遭遇 95
婚活アプリは〝カースト〟を超える 98
女性ボディビルダーと赤身の肉を食べる 101
美ボディ美容師の執筆に協力 103

婚活アプリは玉手箱 107
無料会員でお試し 110

第3章 安心・安全が担保される結婚相談所 113

強いメス。弱いオス 114
1980年代の婚活界を席巻したアルトマン 117
リスクが大幅に軽減される結婚相談所 119
相談所登録時のセックスはNG 121
プロフィール写真と実物が違うのはふつう？ 125
ゴマ油を塗ったような顔 129
女性は男性の経済力と容姿で判断 136
結婚相談所で純愛 138
プロフィールに自信があれば結婚相談所を選ぶ 143

結婚相談所は社交性に自信がない男女向け 145

第4章 社交性が反映される婚活パーティー 149

婚活パーティーの原点はとんねるず？ 150
大人気企画だった自衛隊限定パーティー 151
婚活先進国だったアメリカ 154
ビギナーズラック 158
銀座のホステスと交際 160
極道の元情婦とも。女性ドクターとも 164
会社員は会社員と。専門職は専門職と 167
消えゆくフリータイム。そしてデジタル化 172
ねらい目は1時間半男女各10人くらいのパーティー 174
業種・職種に合った会場を選ぶ 177

女の文句。男の文句 179
人間性がわかる婚活バスツアー 182
謎の宗教行脚のような婚活ハイキング 186
達成感の共有で親しくなる婚活料理教室 188
婚活パーティーはシンプルなスタイルがいい？ 189

第5章 「婚活中毒」という病 193

育ち切ってしまった自我 194
婚活には〝助走期〟がないから、執着もない 196
婚活は等価値取引 199
女性の婚活中毒化事情 201
婚活のエンタテインメント性と自己確認 203
ソロで生きる 205

結婚しないかもしれない婚活 208
おわりに 212

第1章 婚活のメインストリームになった婚活アプリ

セックス直後にお経を唱えた女

「南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経……」

全裸の女がベッドに腰掛けてお経を唱えている。まぶたを閉じ、手を合わせて唱える「南無妙法蓮華経」はときどき途切れ、よく聞き取れない早口のお経が挟まる。

どう対応していいかわからず、ただ背中を眺めていた。

こちらも全裸。さっきまでは二人で行為に没頭していた。上になり、下になり。甘い吐息をもらしていた彼女の口は、今お経を唱えている。突然始まった儀式に、最初は自分がお祓いされているのかと思った。

南無妙法蓮華経の彼女は40代後半。婚活アプリを通して出会った。職業はセクシーなランジェリーの販売。インターネットを利用して個人でビジネス展開していた。顧客はホステスや風俗嬢らしい。

アプリのプロフィールにアップされた顔写真は美しく、50歳に近いとは思えない艶を感じた。30代といわれても信用しただろう。

彼女には離婚歴があり、すでに成人した息子がいる。別々に暮らしていると書かれていた。

「なんでも話し合える男性と出会いたいです」

自己紹介欄の一行が目を引いた。自分がプロフィールに書いた文と同じだったからだ。

婚活アプリとは結婚を望むシングルの男女が出会うための、インターネットのアプリケーション。プロフィールや希望条件を入力、スマートフォンやパソコンの検索機能を使い、効率よくパートナーを探すことができる。魅力を感じた相手に申し込み、相手が応じれば〝マッチング成立〟となる。一対一でメッセージを交換できて、その後は自由恋愛だ。

南無妙法蓮華経美人とはめでたくマッチングし、都内で食事をした。最初の食事の後クルマで自宅近くに送りハグしてキスをした。あまりにも好きなタイプだったので、情熱がマックスに達した。

彼女との会話は毎回盛り上がる。いつも3時間から4時間も話し続けた。その席で銀座のクラブで長く働いていたと打ち明けられた。彼女の座持ちのよさの理由がわかった。接客のプロだったのだ。

三度目の食事の後、写真が送信されてきた。姿見に映る彼女自身のセミヌードだ。仕事で扱っているものなのだろう、布の小さい、透けそうで透けないピンクのセクシーなランジェリーを身につけていた。全裸よりもむしろそそられる。

「素敵です！」

興奮して、すぐにお礼のメッセージを送った。
翌日も写真が届いた。やはりランジェリー姿。今度はブラック。腰に手を当ててポージングしていた。
「ありがとう！　会いたい！」
メッセージを送り、その翌日、食事の後、シティホテルに入った。最高の夜になるはずだった。服を脱がし合い、抱きしめ合い、彼女の大切な部分に手を伸ばすと、つるつるに処理されていた。テンションはさらに上がった。その後はあまり記憶がない。ベッドの上でめくるめくような時間が流れた。
ところが行為の後、こちらが余韻に浸っている横でお経が始まったのだ。
「えっ……」
息がつまりそうになった。セックスとお経が、頭の中で結びつかなかった。
さっきまで屹立していた自分のモノを上から見る。しょぼんと下を向いている。情けない姿だ。やることもないので、自分のモノをちょんちょんと人差し指ではじいてみる。うんともすんとも言わない。
まるで涙のように、尿道から滴が落ちた。周囲の毛には白いものが数本交ざっている。

物悲しさが増す。

お経は15分ほどで終わった。

彼女はある新興宗教の信者だった。あまり耳にしない比較的マイナーな教団だ。彼女によると、毎日朝晩お経を唱えないと地獄に堕ちるそうだ。それは僕も同じらしい。だから、自分と同じ教団に入信してほしい。それが無理でも、彼女の信仰は認めてほしい、と言われた。

朝晩お経を唱える人と暮らすのは難しい。自宅には大きな仏壇があるらしい。一緒に暮らしたら持ってくるだろう。

ホテルで彼女はこちらを強引に入信させようとしてはこなかった。しかし、交際が進めば強く要求してくるだろう。献金も強いられるはずだ。

残念だけど縁はないと思った。

帰宅して彼女が入信している宗教をネットで検索すると、さまざまな記事が見つかった。彼女の自宅が総本山から目と鼻の先にあることもわかった。年齢を考えても、長く濃い信者生活を送っているのだろう。

女性信者はみんなアソコのまわりの毛をつるつるになるまで剃っているという書き込み

もあった。教祖の方針らしい。どんな教祖なのだ？　単純にスケベなだけじゃないのか？　まさか教祖がアソコを一人一人チェックしているわけではないよな？　気になった。

5人に1人が婚活アプリで出会って結婚

コロナ禍以降、婚活アプリは婚活ツールのメインストリームになった。アプリで出会って結婚するカップルは年々増えている。

２０２２年11月16日、11月22日の〝いい夫婦の日〟を前に明治安田生命が発表したアンケート結果によると、この年に結婚した夫婦の22・6％がアプリで出会っているという。5人に1人以上がアプリで結ばれた計算だ。新型コロナウイルスの感染拡大で、出歩く人は減った。感染が落ち着いてきた２０２３年春になっても、平日の夜8時くらいになると、街は静かになる。外での出会いが圧倒的に少なくなっているはずだ。

リクルートのブライダル総研「婚活実態調査２０２１」では、シングルの男女の21・8％がアプリを利用しているそうだ。

長い間、結婚にいたる出会いのきっかけはほぼ三つに限られていた。同級生や部活の同期や先輩後輩など学生時代からの仲間、社内恋愛をはじめ仕事で知り合った相手、友人・

知人の紹介だ。

同じ学校に通い、同じクラスや部活に所属していれば、おたがいの人柄がわかる。一緒に働いていれば、仕事ぶりも協調性もリーダーシップもわかる。信頼できる友人・知人の紹介ならば、その友人・知人というフィルターを通過していることが安心感になる。一種の〝保険〟が機能している。

この三つでパートナーを見つけられなかった男女が頼るのが古典的なお見合いや結婚相談所だった。いまでいう婚活だ。

だから、婚活はモテない男女が集う、結婚へ向けての言ってみれば〝最終手段〟だと思われていた。婚活はパートナーを得るためにお金を使う恥ずかしい行いであり、友人・知人に知られないようにこそこそ行われていた。

２０００年代後半、後輩の結婚披露宴で妙なスピーチを頼まれたことがある。新郎新婦を紹介し、仲を取り持ったという筋書きで話してほしいというのだ。

彼らは30代で、婚活アプリ（当時は婚活サイトといった）を介して出会い、結婚にいたった。そのことを親や親しい友人たちは承知している。しかし、仕事関係や親戚筋には知られたくないというのだ。婚活はまだ市民権を得られていなかった。

しかし、時代は変わった。30代以下の世代は、婚活アプリへの登録に抵抗感がない。

前述のとおり、婚活アプリでは気に入った相手に気持ちを伝え、相手が応じるとマッチング成立となる。アプリを通して、パソコンやスマートフォンの画面上で会話することができる。アプリによっては、有料のオプションでメッセージも添えられる。

南無妙法蓮華経美人には次のようなメッセージを送った。

「はじめまして。ケンスケといいます。プロフィールの〝なんでも話し合える男性〟に共感しました。僕もなんでも話し合える女性を探しています。ご自身でビジネスをされているところにも魅力を感じました。お写真の笑顔もとても素敵です。お話するチャンスをいただけませんか？　僕は本を書く仕事をしています。小説ではなく、さまざまなジャンルのノンフィクションを書いています」

翌日彼女が承諾してくれて、マッチングが成立した。

「ウッシャ！」

テンションが上がった。すぐにお礼のメッセージを送る。

「僕の申し込みをご承諾いただき、ありがとうございます！　うれしいです！　このアプリでお話して、僕に安心していただけたら、実際にお目にかかりたいです。よろしくお願

第2章 アラカンでも出会える婚活アプリ

登録者数の多い婚活アプリを選ぶ

婚活アプリを利用するにあたっては、どの会社のアプリに登録するか――が重要だ。

優良アプリはどれか、自分に向いているのはどれか、最初はさっぱりわからなかった。そもそも、婚活アプリと出会い系マッチングアプリとの違いもわからない。

まず、ネットで調べた。すると、優良婚活アプリを4社とか5社とかあげて長所短所を箇条書きにしているサイトがいくつもあった。信用できそうだった。どのサイトもたいがいは同じアプリを選んでいる。ベスト3はほぼ同じだったので、そこから選ぶことにした。

ネット情報を見る上で、それが信頼できる情報かどうか、筆者は執筆者で見分けている。匿名のサイトはとりあえず信頼しない。無責任なことが書かれている。記事に署名があり、プロフィールがあり、さらに書き手の顔写真がアップされている記事を信頼する。内容に関する責任の所在が明確だからだ。

優良ではないマッチングアプリ、たとえば売春の温床になっているようなものはすぐにわかった。無料の仮登録をすると、即、女性登録者が露骨に誘ってくる。

「気持ちイイ関係目的で会おうよ。私は準備ＯＫだから、都合を教えて。いつでも発射できる？」

「お兄さん今彼女いる？　性欲強めで、ちょっと変態入ってる私だけど、需要ある？」

こんなメッセージを送ってくる。たいがいは写真付きだ。かなりかわいい。胸の谷間を強調した露出度の高い服装で、つい見入ってしまう。寂し過ぎると、こういうアプリに登録してしまうのかもしれない。

結局、複数のサイトが勧めている婚活アプリにいくつか登録し、反応のいいもの、つまり女性と出会えるものを続け、反応のよくないもの、つまり女性にあまり会えずコストパフォーマンスの低いものはやめることにした。

婚活アプリの選択では、次のことがわかった。

①登録者数の多いアプリを選ぶ。

どれか一つを選ぶならば、よけいなことは考えずに、登録者数が多いアプリにするべきだ。登録者が少なければ、当然出会いも少ない。会えない。知り合いが運営するマイナーなサイトにも登録したが、会えなかった。会員が少ないからだ。そういうアプリは、会員の数よりも質だと主張しがちだが、それはうそだ。数が大切。

②他社と比べて会費が安過ぎるアプリは避ける。

会費が安いアプリには、その会費に見合う男女が登録している。婚活にコストをかけないという判断が働いているので、真剣度は低い。

③他社と比べて会費が高過ぎるアプリも避ける。

会費が高過ぎる、つまり単価が高いアプリは、登録者数が少ない可能性が高い。単価を上げなくてはビジネスとして成立しないからだ。他社よりも運営コストがかかっている。たとえば、質の高い男女が登録していると装うためにサクラを雇用していると、その人件費分が会費に含まれる。

④プロフィール写真がきれいなアプリを選ぶ。

アプリの質の高さはプロフィール写真に反映される。上質なアプリは画像の解像度が高く、写真が美しい。だから、男女とも魅力的に感じられる。一方、解像度が低いと、画像が粗いので、実際よりも肌が荒れて見えたり、顔色が悪く見えたりする。つまり、自分の評価が下がる。

以上の四つを意識すれば、大きな間違いはおかさないだろう。

経済的に余裕があるならば、複数のアプリに登録してみるべきだ。選択肢が広がる。ただし、とくに女性は会費が安かったり無料だったりするため、複数のアプリに登録しているケースが多く、同じ顔やプロフィールをあちこちで見ることにはなる。

プロフィールで本気度を示す

「アラカンにもなって婚活アプリに登録するやつなんているのだろうか？」

そんな不安が登録する際は頭の中をよぎった。しかし、杞憂に過ぎなかった。同世代がたくさん登録していたのだ。

登録はかんたんだ。アプリのガイダンスに従って、まず、クレジットカードで会費を支払う。1か月、3か月、6か月、1年など選択肢があり、その中から選ぶ。長ければ、それだけ割安になる。だからといって、長期間会員でいたくはない。できるだけ早くパートナーを見つけて、一緒に退会したいのが正常な感覚だろう。

とはいえ、1か月で相手を見つけて退会できると思うほどうぬぼれてはいない。それな

りに苦戦は覚悟しているので、3か月コースを選んだ。会費は1万円弱。1か月に300円台になる計算だ。

登録作業を終えて会費の支払い手続きが済むと、今度はプロフィールを記入していく。名前、年齢、職業、学歴、居住都道府県、出身都道府県、体型、飲酒や喫煙の習慣、おおよその年収、希望する女性のタイプ……などを打ち込んでいく。

すべて正直に入力した。もし女性と交際できたとして、嘘をついていると、どこかで訂正しなくてはならない。あるいは嘘に嘘を塗り重ねていかなくてはならない。

必要な項目をすべて打ち込んだら、本人証明を送信する。運転免許証やパスポートなど、顔写真付きの公的証明書をスキャンするかスマホで撮影して送信すればいい。

すると、アプリの会社が審査に入る。間違いなく本人か、記入に嘘がないか、クレジットカードに問題がないか……などをチェックするのだろう。

独身証明書や卒業証明書や収入証明書の提出は求められなかった。つまり、妻帯者でも登録できる。学歴や年収を偽ることもできる。審査は半日から一日。審査が通り晴れて会員になった。

プロフィールには、自己PRと写真掲載のスペースがある。どちらも重要だと思った。

自己ＰＲは、本気でパートナーを求めていることを書いた。独身証明書の提出を求められないからには、妻帯者やナンパ目的の男は一定数いるはずだ。疑われないためにも、本気度を示す必要があると考えた。

趣味は具体的に書いた。好きな映画のタイトル、好きなミュージシャン、好きな作家、好きなスポーツ、ジムに通っていること、健康であること……などだ。

ただし、ちょっと特殊な趣味は書かなかった。たとえば、格闘技系だ。筆者は一時期ボクシングをよく会場で観戦した。そういう好みは伏せた。格闘技を野蛮だと思っている女性は少なくない。プロ野球も観戦する。阪神タイガースのファンだ。それも書かなかった。読売ジャイアンツファンの女性から理解は得られないからだ。かつて、ジャイアンツファンの女性と短期間交際した。プロ野球のことで、頻繁に険悪な状況になった。筆者は「阪神バカ」と罵倒された。

プロフィール写真は必須。人は顔のわからない相手とは会わない

写真は任意だ。掲載してもしなくても本人次第。２０００年代、まだ婚活サイトといっていた時代は写真をアップしない女性が多かった。男性もまだ少なかったと聞いている。

登録していることを知り合いに知られたくなかったからだ。偏見があった。

しかし、２０２０年代の婚活アプリは、顔写真の掲載がスタンダードだ。婚活アプリに登録することが、社会的に理解を得られるようになっている。婚活アプリの利用が珍しくなくなっている。男性だろうが、女性だろうが、たとえアプリを通してだったとしても、顔のわからない相手と交流したくないのがふつうの感覚だろう。そもそも別人が来ても判断できない。

ただし今も大手金融に勤めている人は、上司や同僚に知られると、なにかしら社内的に不利になるかもしれない。教師も生徒の保護者に知られたら学校にクレームが来るかもしれない。

最初に登録した婚活アプリに掲載できる写真はメインが1点。サブが5点までだった。メインは、スタジオでプロのフォトグラファーに撮影してもらったカットを選んだ。自分の著書のプロフィールに使っている正面からのカットだ。きちんとライティングして、きりっとした表情をつくっている。

サブはあえてスナップを使った。仕事をしている姿だ。気づかないうちに撮影されていたカットが2点。1点は顔の右側から。もう1点は顔の左側から。

写真は重要だ。女性も、男性も、相手の顔を見て、さまざまなことを判断する。やさしそうか、知性が感じられるか、清潔感があるか……などだ。プロフィールを見るときは対面前なので、写真からかなりの情報を得ようとする。

だからこそ、メインにはプロが撮影した写真をアップした。気づかないうちに撮られたスナップも実はプロによるものだ。だから、光も自然にまわっているし、構図も計算されている。表情もいいタイミングでとらえられている。

かつて結婚相談所に登録したときもプロフィール用に写真を用意した。プロに撮影してもらったカットだ。そのとき、サンプルとして、相談所のカウンセラーがほかの男性会員の写真をいくつか見せてくれた。いい例、よくない例だ。

よくないほうは、社会人とは思えなかった。髪がぼさぼさだったり、無精ひげが生えていたり、眉毛がぼうぼうだったり、自宅で部屋の中に干された洗濯物を背景に不機嫌な表情をしていたり。いいんですか？　そんな姿を女性に見られていいんですか？　女性に選んでもらいたくてお金をかけてまで相談所に入会したんじゃないんですか？　その男性たちに問いたかった。

もちろん、カウンセラーは彼らにアドバイスしたそうだ。しかし、言うことを聞かない

らしい。自分のお気に入りの写真を持参しているのだ。案の定、彼らはなかなかお見合いが成立しなかったという。その理由には、もちろん写真のクオリティの問題がある。そして同時に、婚活を本業にしているカウンセラーの意見を聞かないという頭の固さが女性に受け入れられなかった。

さて、写真はあと3点掲載できた。しかし、もう手持ちの写真がなかった。ふだん自分の顔写真を撮る習慣がないのだ。新規で撮影することも考えたが、それはやめて、自分が写っていない旅先の風景写真をアップした。1点は都市。ニューヨークの風景だ。もう1点はリゾート。フロリダの風景だ。多くの女性は旅行が好き。そこで、「僕も旅行が好きです」というアピールをして共感を得ようという姑息な手段に出たわけだ。

写真をアップしたところで、婚活アプリの活動のための準備は整った。

申し込む相手を検索

婚活アプリで女性の登録画面を初めて見たときのことは忘れられない。もっとも登録数の多い大手婚活アプリの画面は圧巻だった。

こんなに会員がいるんだ！　と感動した。次から次へと交際できるのではないか、と錯

第3章 安心・安全が担保される結婚相談所

た。断られたら連絡NGのルールがあったからだ。積極的に口説いていなかったことを悔やんでいた。筆者のテンションの高さに、彼女はあきれ、カフェの店員もあきれ、隣のテーブルの女性客も明らかにあきれていた。しかし、ひるまなかった。

結局努力は実らなかったが、気持ちの整理はついた。その後少し時間はかかったが、落ち着きを取り戻していった。カフェのあの3時間は、心の治療だったと感じている。

プロフィールに自信があれば結婚相談所を選ぶ

結婚相談所での婚活はコストがかかる。アルトマン全盛の1980年代ほどではないが、婚活アプリや婚活パーティーと比べると高額だ。

その代わり、安心・安全がかなり担保されている。登録者は、身分証明書だけでなく、卒業証明書や独身証明書や年収証明も提出しなければ入会できない。

つまり、基本的には、にせものはいないし、学歴詐称者もいないし、妻子持ちもいないし、年収詐称者もいない。

筆者は確定申告の際など、公的には「個人事業主の文筆業」に該当し、複数の出版社から収入を得ている。その各社から送付されてきた源泉徴収票のコピーをクリップでとめて、

相談所に提出した。面倒くさかったし、自分の懐具合を他人に見せるのはかなり抵抗があった。でも、それだけの手続きを踏まなければ登録できないのが結婚相談所だ。

だから基本的に、詐欺や物販の営業や宗教の勧誘や投資の勧誘もない。厳重にチェックしているのだろう。会員一人についての〝客単価〟が高いから、婚活アプリほど登録者をたくさん集めなくてもビジネスが成立する。スタッフの目が行き届く。当然、結婚へ向けて本気度の高い男女が集まっている。

ただし、人には向き不向きがある。結婚相談所に登録すれば誰もが結婚できるわけではない。

では、相談所ではどんなタイプが成果を上げやすいか――。

男性であれば、高学歴、誰もが社名を知る一流企業勤務や公務員など社会的に評価の高い組織に属している人、医師や弁護士のような難易度の高い国家資格を有する師士業に就いている人などだろう。

女性であれば、名門女子大、いわゆる〝お嬢様学校〟を卒業しているか、あるいは一般職だったとしてもだれもが社名を知る企業に勤めていることではないか。育ちがいいと思われやすいプロフィールが好まれ、成果は上がる。

結婚相談所は、まずプロフィールで強くアピールできないと、お見合いをリクエストされない。リクエストしても応じてもらえない。プロフィールに強みがある男女が、結婚相談所では圧倒的に有利だ。

婚活アプリはいくらでもうそやごまかしができる。そして、うそやごまかしがあることが前提で登録している。だから、プロフィールも、6掛け、7掛けで解釈する。一方で、結婚相談所はプロフィールがそのままその会員の評価になる。

結婚相談所は社交性に自信がない男女向け

結婚相談所においても、ほかの婚活ツールと同じように、年収の高い男の人気が高い。相談所のアドバイザーを取材した際も、女性会員はやはり高年収の男性会員とお見合いしたがると話していた。

ここは筆者が登録したいくつかの結婚相談所とは別の会社だが、多くの女性会員が入会時はピュアな気持ちで活動をスタートさせるという。しかし、複数の相手からお見合いを申し込まれるようになると、年収の高い順番にお見合いのセッティングをリクエストし始める。

でも、それはしかたがない。相手の性格は会ってからでないとわからない。会ってもなかなかわからない。ならば、数値化されていてわかりやすい年収の順にお見合いをしてしまうのは健全な判断ではないか。

ただし、そのアドバイザーによると、何人も会っていると自分がどんな男性を求めているのかがわからなくなってくるらしい。その結果、人柄よりも年収を基準に相手を選び、ほんとうに自分にふさわしい相手と出会えなくなるケースが少なくないという。そんなミスを犯さないように、アドバイスする。そう考えると、優れたカウンセラーに出会うこと、カウンセラーといい関係を結べることが大切だと感じる。

また成婚が早い男性は、女性を一所懸命楽しませて、相談所規定の交際期間内も二人の時間を最優先し、仕事の時間とプライベートをきっちりと分けている人だという。

この話を聞いたときは、かんたんなことのように思えた。しかしよく考えると、実際に行うのは難易度が高い。定年退職しているならともかく、50代までは忙しい。女性を楽しませることにばかり時間を費やしてはいられない。

筆者のような定年のない職業だと、ずっと働かなくてはいけない。女性の側も働いてほしいと思うだろう。その上で楽しませるとなると、時間のやりくりもエネルギーを注ぐあ

んばいもかんたんではない。

一方成婚しやすい女性は、自分の好みに執着し過ぎないタイプだという。

その相談所の登録者は中高年以上が主なので、離婚歴がある、子どもがいる、仕事をリタイアしている男性がほとんど。にもかかわらず、そういう条件を全部NGにする女性もいるそうだ。当然なかなかお見合いは成立しない。40年、50年も生きてきて、プライベートが身ぎれいな男性はほとんどいない。過去に何もないほうが、むしろ心配だ。

なのに、無茶なリクエストもあるそうだ。「東大卒かドクターしかお見合いしたくない」という60代後半の女性もいたらしい。10歳以上年上でもかまわないとは言ったそうだが、80歳でシングルの現役ドクターなどは世の中にほぼ存在しない。その話を聞き、結婚相談所の仕事もつくづく苦労が多いと知った。

アドバイザーによると、社交性がないと自覚している人、人見知りの人は、相談所が向いているそうだ。だから、初対面の人と話す機会の少ない経理や技術職の会員は多いらしい。社交性の部分は担当カウンセラーがサポートできる。おそらく相談所にとっても得意のタイプなのだろう。

そして結婚相談所も、婚活アプリ同様、登録者数が多い会社を選ぶべきだと思った。少

なければ、その分お見合いは成立しない。筆者は登録者数の少ない相談所にも登録したが、ほとんどお見合いはできなかった。

会員数の少ない結婚相談所はたいがい「会員数が多ければお見合いがたくさんセッティングできるわけではありません」と言う。しかし、信じてはいけない。登録者数が少ないのに、お見合いが数多く行えるはずがない。

第4章 社交性が反映される婚活パーティー

消えゆくフリータイム。そしてデジタル化

１９９０年代以来、婚活パーティーは時代とともに進化してきた。

最初がねるとんパーティーのスタイルだったことはすでに述べた。２０００年代後半からは出会いの真剣度が増し、回転寿司スタイルの一対一対話とフリータイムの２部構成がスタンダードになった。

しかし婚活パーティーのフリータイムは、参加者にとって平等のようで、実はまったく平等ではない。パーティー会社に決められた席によって不平等が生じる。

男性の場合、好みの女性が近くの席ならば、すぐに話しかけられる。遠かったらほかの男性に先を越されてその女性と会話はできない。

積極的なタイプならば、女性と次々と会話できるが、消極的だと誰とも話せない。つまり、早い者勝ち状態だった。自己責任ではないかという意見もありそうだが、そもそもふだんの生活でパートナーを見つけられないのに、お金を払って参加したパーティーでも話せない状況になるのは健全とはいえない。

フリータイムではスタートとともに男性参加者はきれいな女性に発情期のように群がり、実に見苦しい状況だった。話したい相手と会話できずにパーティー会社のスタッフにクレ

ームを言う男もいた。

男は単純なので、容姿のいい人気の高い女性の前に列をつくる。しかし、人気の高くない女性には誰も話しかけない。そういう女性は一人ぼっちの時間を過ごさなくてはいけない。残酷だ。それが続いたらトラウマになりそうだ。

一方で人気の高い女性も、自分の好みの男性と話せるとは限らない。まったく興味のない男がすばしっこく話しにきても避けられない状況だ。こうした問題を考慮して、フリータイムは下火になっていった。

２０１０年代後半、婚活パーティーは一対一の対話のみで全員がある程度均等に会話を楽しめるスタイルがスタンダードになっている。

婚活パーティーといいつつパーティーではない形式も増えた。個室化だ。

婚活パーティーは長い間、回転寿司がスタンダードだった。女性が円を描くように配置され、その周囲を男性が移動しながら会話の相手を替えていく。ホテルの会議室や宴会場で開催されるので、全体を広く見渡せるが、隣の男女の会話も耳に入る。

男性参加者は目の前の女性をベタ褒めする。数分で相手をチェンジすると、次の女性をまたベタ褒めする。すぐ隣で、一つ前に会話した女性にも聞こえてしまう。バツが悪い。

聞くほうも、聞かれるほうも。おそらくいい気持ちはしない。そこで、ひと組ずつパーティションで仕切る個室スタイルが増えていった。

パーティションは隣のブースの会話はたいがいはまる聞こえだ。それでもほかの男女が視界に入らないと、気が散ることなく、自分たちの会話に集中できる。

デジタル化も進んできた。かつての婚活パーティーは男女が気に入った相手を専用の紙に書いてスタッフに提出し、スタッフが手作業で集計してカップリングしていた。短時間での作業を強いられるので、ミスが生じていたはず。

そこで、参加者名簿や集計はタブレットや参加者が持参するスマートフォンで行うようになってきた。ミスやトラブルは大幅に減少しているだろう。

ねらい目は1時間半男女各10人くらいのパーティー

では、どんなタイプの人が婚活パーティーで成果を上げることができるのか。１９９０年代からあるメジャー婚活パーティー会社の女性アドバイザーに取材をした。

彼女によると、婚活パーティーは対面に慣れている人が有利なので、男性でも女性でも、営業職に就いている人が向いているそうだ。最初から実物を自分の目で見て会話したいタ

イプも婚活パーティー向き。成果が上がろうがうまくいかなかろうが自分の責任の範疇でやりたいという人にはお勧めしたい。

パーティーは生身の自分で参加する。表情や声のトーンに心のコンディションが表れる。だから、健康状態がいいとき、仕事が好調なときに参加するといい。

周囲から実年齢よりも見た目のほうが若いという評価の人も、パーティーが向いている。婚活アプリや相談所の場合、実年齢が50歳ならば、童顔だろうが老け顔だろうが、50歳は50歳だ。プロフィールの時点で年齢を基準にジャッジされる。

しかし婚活パーティーでは、見た目年齢で評価されるケースが多い。50歳だったとしても、声に張りがあり、肌がすべすべで、服装も若々しければ、その分高評価になる。

アプリや相談所のプロフィール写真は静止画だ。しかし、パーティーはライヴだ。目の前で話し、表情が動き、身振り手振りもあるので、活力が感じられる。

自分の個性を客観視して、あるいは周囲の意見を聞いて、自分に向いた婚活ツールを検討するべきだろう。

婚活アプリや結婚相談所は登録者数が多い会社を選ぶのが基本だと前章、前々章で書いた。人数が少ないと、当然出会いのチャンスも少ない。しかし、婚活パーティーは、参加

人数が少な過ぎず多過ぎずのパーティーがいい。少な過ぎるとそれだけチャンスが減る。一方多過ぎると、一人一人と会話できる時間が短い傾向がある。

たいがいの婚活パーティーは、1回1時間30分から2時間で設定されている。一度決まったスケジュールは基本的に長くも短くもならない。ホテルの会議室や宴会場で開催される場合はレンタル時間が決まっている。パーティー会社の自前の会場の場合も、前後のパーティーがフィックスされている。すでに決まった時間尺でパーティーが行われるので、人数が多ければ、その分1回の会話時間は短くなる。

会話時間が3分以下だと、挨拶をしてかんたんな自己紹介をすると、残り時間はほとんどない。相手に強い印象を与えるのは難しい。

これはあくまでも主観だが、1時間30分で設定されているパーティーならば男女各10人くらい、2時間で設定されているパーティーならば男女各15人以内ならば、一人一人とある程度会話ができるのではないか。それより人数が多いとあまり会話ができない。相手の記憶にも残りづらい。

本数は多くはないが、3時間くらいで設定されているパーティーもある。たいがいはディナー、あるいはランチのような食事や飲酒をしながら婚活する企画だ。こういうタイプ

の場合は男女各15人くらいが妥当に思える。

食事や飲酒を伴うパーティーは、さらに社交性が問われる。このタイプは、たいがいはグループでの会話になる。その環境だと、積極的に会話に参加できる人、リーダーシップをとれる人、周囲に配慮ができる人の一人勝ちになる。グループでの会話に上手に加われないと、ただ飲食して帰ることになりかねない。社交性に自信がもてないならば、飲食を伴う婚活パーティーは避けるべきだろう。

業種・職種に合った会場を選ぶ

婚活パーティーには地域性がある。筆者は東京在住なので、東京都内および近郊のパーティーが対象。さまざまな会場に参加したが、顔ぶれはまったく違う。

まず東京近郊は、あくまでも筆者が参加したものに関してだが、東京都内在住の女性はほぼいなかった。横浜の会場だと、横浜、川崎をはじめ神奈川県在住の人が主。小田原や箱根に住む人たちにとっては、東京よりも横浜のほうが参加しやすいのだろう。同じように大宮の会場は埼玉県在住の人、千葉や船橋などの会場は千葉県在住の人が主と思っていいだろう。

新宿、渋谷、恵比寿、青山のような都内西側の会場は都内および神奈川の参加者が多い。銀座、丸の内あたりは都内も神奈川も千葉もまんべんなくいる。池袋あたりは都内の北部や埼玉在住の参加者が多い。

また業種や職種にも傾向を感じる。銀座や丸の内の会場は堅実な会社員中心。青山や恵比寿の会場は、美容系やクリエイティヴ系が交じる。

筆者は会社員ではないので、丸の内周辺のパーティーに参加すると、女性からまったく相手にされないこともある。堅実な会社員の女性は、堅実な会社員の男性を求めているのだろう。しかし、青山や恵比寿の会場だと自分と同じような業種・職種の女性もいて、理解を得られる。女性のリアクションが明るい。それが結果にも反映され、カップリングの機会も増える。

こうした傾向は関西にもあるのでは。京都、大阪、神戸は、距離が近いのに、住んでいる人のタイプがまったく異なる。女性のメイクもまったく異なる。当然それぞれの土地で行われる婚活パーティーの雰囲気も違うはずだ。

平日夜開催のパーティーでは、業種・職種の傾向はより強くなる。仕事の後その脚で会場を訪れるからだ。このような傾向を考えて会場を選ぶと成果が上がる可能性が高まるの

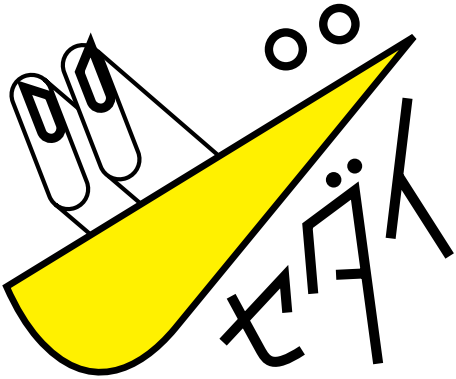
ではないか。

婚活パーティーに参加するとさらに気になることがある。婚活への男女の意識の違いだ。女性はワンピースやスーツなどで参加して、男性に好感を持たれようという意識が強い。言い換えると、真剣度が高い。一方、男性は近所にパチンコを打ちに出て来た風が目立つ。〝日曜日のお父さん〟のような弛緩した雰囲気がただよっている。しわしわの綿パンやTシャツ、汚れたスニーカーで参加している男性もいる。デニムでもいいが、身体に合ったサイズのものを選ばないと、だらしなく見えてしまう。

言葉遣いももっと意識したほうがいいと思った。女性は誰に対してもとても自然な敬語で会話をしている。一方男性は初対面の女性に対しても常語、つまりタメ口で話す様子が目につく。ひょっとしたら、親しみを感じてもらおうという意図があるのかもしれない。しかし、女性の意見を聞くと逆効果だ。

女の文句。男の文句

女性たちに婚活で出会った男性で嫌だった体験を聞いたところ、次のようなことを言われた。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!